〔共同研究：日本文化としての将棋〕

将棋の日本到着時期をめぐって

――増川宏一説に対する批判――

木　村　義　徳*

は　じ　め　に

将棋は古代インドに発生し，ほぼ旧世界全体に伝播した。その日本到着をめぐる諸説は多い。これは将棋史上の重要問題であるし，いかなるものがいつ頃到着したのかを明示する史料がないため，かえってロマンを誘うのかもしれぬ。まず時期については５世紀から11世紀初期まで各世紀ごとの説がある。また型については漢字表記型説と立像型説があり，ルートについても中国からと東南アジアからとがあり，さらに日本将棋日本起源説まである。

これらのうち，増川宏一は漢字表記のものが10世紀後半から11世紀初期に到着したとし，私はチェスタイプの立像型のものが６，７世紀に到着したとしている。両者の間でとくに到着時期をめぐってホットな論争がいま展開されている。はじめは穏やかであったのが手紙のヤリトリもあってエスカレートしてしまったのである。主な論著を発表順に並べると次のようになる。

① 『将棋Ⅰ』増川（1975年，法政大学出版会）
② 『将棋Ⅱ』増川（1985年，法政大学出版会）
③ 『将棋の起源』増川（1996年，平凡社）
④ 『2000年の将棋史』木村（『将棋世界』1997年６月号より17回連載）
⑤ 『将棋の駒はなぜ40枚か』増川（2000年，集英社）
⑥ 『持駒使用の謎――日本将棋の起源――』木村（2001年，日本将棋連盟）
⑦ 『チェス』増川（2003年，法政大学出版会）

当然のことに④が①②③に対してのものであり，⑤が④に対し，⑥が①②③⑤に対し，⑦が⑥に対し，本小論は主に⑦に対するものである。

私は⑥で「相手の論旨を批判しやすいものに変えて紹介し，それからの批判である」「多分，正確に紹介すると批判できなくなるとみたのであろう」と述べ，⑦でそれを再確認した。

*日本将棋連盟

⑤の時は名指しを避けたり少し遠慮もあったが，⑦ではもう遠慮なく大きく曲解紹介している。

また，増川以外の数人の研究者からも小著は正攻法による批判を受けており，それらについてもお答えしたい。

（１）　相手の論旨を批判しやすいものに大きく変えて紹介する　その１

「この第１波で来たのはインドの原将棋で，４人制のさいころを用いるチャトランガであり，６，７世紀に日本に伝来したのはこの型であったと推論している。（傍線木村）

これについて，チェス史研究支援財団が発行した『チェス史の定義へのアンケート論集・1999』にザイエット教授は『チェスの定義』と題する論文を発表している。要点は４人制のさいころを用いるチャトランガは２人制のチャトランガから派生したもので，11世紀中頃以前に４人制チャトランガの記録は見当らない。11世紀中頃以前に存在していたとは推定できないという結論である。

すなわち，木村氏の言う駒の弱い動きの『インドからの第１波である原将棋』は，11世紀以後ということになる。伝播のための経路や時間を考慮すると，さらに遅れることになる。多くの枚数を費やして『弱い駒』と『強い駒』を力説した木村氏の主張は，根底から覆ってしまう。すなわち，木村氏のいう『６，７世紀伝来説』を採れば，当時はまだ４人制チャトランガは考案されず，４人制チャトランガの『弱い駒』が伝来したとするならば，『６，７世紀伝来』は否定されるという支離滅裂な説明になる。」増川⑦（219頁）

傍線の部分がひどい曲解である。この通りに小著が述べたのなら支離滅裂どころかなんと言われてもしかたがあるまい。しかし，小著ではまずまえがきで「私見は32個の色わけ立像型と８×８の盤，すなわちチェスタイプのものが到着し，多くの改良と変化を重ねて現行将棋に至ったと想定する」と述べている。木村⑥

［図１］日本伝来当初の象棋（推定）

また図１をごらん願いたい。小著の46頁に図２として載っているものを再掲した。中国からはまだ立像型のままで，駒名が中国語に翻訳された頃のものが日本に到着したと想定して

いる。「２人制が到着した」とは書いていないが，わかり切ったことだからである。もちろん，これらのほかにも２人制を明示する文章は小著中にたくさんあるから，増川がうっかりでまちがったとは思えない。

私はチェス史の通説はダイスつき４人制→ダイスつき２人制→ダイスなし２人制と理解し，それに従い，最後のものを原将棋と定義した。しかるに増川は，小著はダイスつき４人制が日本に到着したと推論している，と曲解紹介したのである。小著を読めばだれにもわかることであるが，「チェス」のみの読者にはわからず，木村はおかしいと思うであろう。

そもそもダイスつき４人制はインドにのみとどまったようであり，その点はチェス史の研究者の間にコンセンサスがあるようである。それゆえ２人制→４人制の論者はその点を４人制が２人制からのバリエーションとする理由の一つにしているほどである。それゆえダイスつき４人制が日本に到着したなどという発想は，だれにも不可能なことであるし，その点は増川もよく承知しているはずである。

なお，増川は以前は４人制→２人制に従っていたはずであるが，今はザイエット教授を信奉して２人制→４人制に修正しているようである。ただし，教授の２人制先行説は，多分木村の２人制到着説と矛盾しないのであろう。それゆえ批判するためにはどちらかを変えねばならず，まさかザイエット教授説を変えるわけにいかず，木村のほうを変えて支離滅裂という言葉を使いたかったらしい。

ここで増川の遅い到着説の理由を紹介する。③と「将棋の発生と伝播」（『考古ジャーナル』平成10年３月号）によると，ⓐ正倉院に将棋がないこと，ⓑ10世紀前半の「和名類聚抄」にないこと，ⓒ古代の膨大な文献にもないこと，を理由としている。しかし，これらは①の段階で周知のことであったのに，その時は「かなり早い到着」としている。

そして，②で遅い到着に修正したのだが，その時の理由は「二中歴」に囲碁は名人級の個人名をあげているのに，将棋はルールのみであるからまだ実力者もおらず「新進の遊戯」だったとしている。これでは理由として薄弱だから周知のⓐⓑⓒを補証にすべきであろうのに，それをしていない。

しかも③の時は②の時の理由がカットされている。多分，どの理由も薄弱すぎることを承知しているからであろう。小著でほぼ完璧に批判したため激怒してルール違反に及んだのに違いない。

また，増川は⑦で「伝来の時期は文献資料と出土資料により10世紀後半から11世紀初期と推定できる。」と述べている。11世紀初期とはきわめて大胆と言えよう。まぜなら駒型が完成している興福寺駒は1058年頃のものなので，到着後わずか50年ほどで駒型が可能としていることになる。その説明はないので事情通の人達の驚きを誘っているはずである。

（２）　相手の論旨を批判しやすいものに大きく変えて紹介する　その２

「第２に氏がチェスは５，６世紀に中国に伝来の根拠として挙げているのは唐の牛僧儒

（779－847）の書いたとされる怪奇小説の『玄怪録』である」。増川⑦216頁

５，６世紀に中国に到着の根拠として小著が使用した史料は『周書武帝本紀』『隋書経籍志』『芸文類聚』である。いずれも７世紀前半のものであるから，『玄怪録』とは200年間も違う。すなわち

「『周書武帝本紀』天和４年（569）の条に「帝は象経を製成し（つくりおわり）百僚を集めて講説す」とある。古くからこれを象棋と解する人が多く，今でも中国人に多いようであるが，伊東倫厚（「将棋探源」『将棋ジャーナル』連載）が詳論して別のゲームと結論している。武帝の『象経』そのものは残っていないが，臣僚の讃と賦が残っており，手がかりになっている。

幸田露伴（「将棋雑考」）も別のゲームとしているが，武帝は当時民間に流行していた象棋を参考にしたはずと想定している。全く新しいゲームを創作するのは困難だからとのことである。その通りと思う。将棋の二元発生論がありえぬことは後述する。

武帝は伝統宗教の道教に肩入れして外来の仏教を弾圧した人である。また衒学的でもあったらしく，道教関係の書をいくつか撰してもいる。それゆえ，外来の象棋に対抗してかつ知的作業のつもりで，象棋類似の新しいゲームを創作しそうでもある。以上のほかつぎの二つの史料によって露伴の想定を補強できる。

まず，唐初（７世紀前半）に編纂された『隋書経籍志』（唐初の文献目録）の兵部に『象経１巻周武帝撰』とある。その隣に『碁法１巻梁武帝撰』以下囲碁の専著が10冊もあり，そのほか『雑博戯』『投壷経』というのもある。ゲーム類は兵部に属するわけであり，武帝の『象経』がある種のゲームであることはまちがいあるまい。

なお，増川宏一はこの『象経』を天文書として（将棋の起源）象棋及びゲーム類とは無関係のものと想定しているが，『隋書経籍志』にはほかに天文部もあるので増川の想定は無理である。

もう一つはやはり唐初の『芸文類聚』巻７巧芸部に『周武帝が象戯をつくる』とある。この編者は武帝の象経を読んだはずであり，それが象棋類似のものであるため，『象戯』としたのに違いない。象戯という文字は象棋と日本将棋の雅名として後世にもしばしば使われているが，この頃からそうだったのかもしれぬ。

以上によって民間にあった象棋を参考にして象棋類似のゲームを周武帝が創作したという幸田露伴の想定は，かなり可能性があり，それゆえ当時すでに象棋が中国に存在していた可能性も大きいと思う。」木村⑥48頁

長文になってしまったのは増川が小著を想像とか杜撰とかしきりに非難していることに反論するためもある。これは古代史としては十分な論証のはずである。逆に増川は象経＝天文書説に理由をあげていないし，隋書経籍志と芸文類聚を見落している。

なお，中国に５，６世紀到着ということは日本に６，７世紀到着の補証として小著の中で強調しておくべきであった。これは存在しなかったという想定よりずっと可能性が大きいか

らである。すなわち，５，６世紀の中国に象棋が存在しなかったとするのには，まず象戯という文字が象棋とは無関係なことを論じ，さらに後世において象棋の雅名になったことも論じなければならず，きわめて困難な作業になるであろう。それゆえ増川も正攻法をあきらめ，曲解紹介にきりかえたのに違いない。なお，使用史料についての微妙な解釈なら誤解されるかもしれぬ。しかし，使用史料そのものをうっかりまちがうことはあるまい。

また同じ項に「『遅くも６世紀に到着していたはずの象棋だが，確実な史料に現われるのは９世紀になってしまう』と述べている。突然何の説明もなく資料も提示せず９世紀が３世紀遡って６世紀になってしまう」。増川⑦217頁

突然でないし，説明もあり資料も提示している。すなわち，前述の長文がこの直前にあり，それをふまえて「遅くも６世紀」としたのである。前述のように，５世紀もかなりの可能性があるので，そう書きたいところを控えたつもりである。

以上，増川が論争の場合に相手の論旨を批判しやすいものに変えてしまう実例を⑦からあげたが，同様の実例は③からはじまっているのである。すなわち「象棋から将棋への変化はどのように経たのか，とりわけ線上を進む駒がなぜ枡目のなかを進む駒になったのか」。増川③188頁

これに対して「増川は中国伝来説＝現行象棋伝来説ときめているようであるが，これは増川の誤解である。中国伝来説といってもいろいろあり，いかなるものかなにも言わない人もおり，私見は立像型の頃の到着であり漢字表記の人達もばくぜんとしており交点置きなど考えていないことは前述した。増川がなにゆえこのような誤解をしたのか不審である。」木村⑥49頁

私はまさかと思い誤解と不審にとどめたが，今にして思うとこの段階から増川は意識的に変えていたのに違いない。純理論的にも中国伝来説にはいろいろありうるわけだし，線上を進む（交点置き）からマス置きへの変化などありえぬわけだから，難題をつきつけるためでもあったろう。もっとも，中国伝来説（漢字表記）の各位のほうも明言を避けているので批判しにくかったのかもしれぬ。

以上，本節で述べたところも小著を読めばわかることだが，「チェス」のみの読者にはわからず，木村はおかしいと思うであろう。

なお，以上の２節は小著の内容を大きく変えて批判をしているから，論争のルール違反であることは確実である。以下の３節は一応論争の範囲内かもしれぬが，かんじんな部分の紹介を省略したりして公正を欠いているし，批判としても著しく不当なものである。

（３）　あまり必要のない史料なので引用しなかったら都合がわるいので隠蔽したと非難する

「第１に木村氏は自著の中で拙著の多くの部分を引用しているが，拙著『将棋の起源』（1996）で紹介したサンスクリット語文献『ハルシアチャリタ』については意図的に引用し

ていない。この部分は７世紀の北西インドの王ハルシアの伝記の１節で，王の宮廷に仕えていた詩人バーナが630年頃に記したものである。このなかでチャトランガについて言及した箇所が最も古いチェスの記述である。最古の文献史料であることは４人制起源説を採る研究者も２人制起源説を主張する研究者も等しく認めていて，チェス史研究の定説となっている」。「７世紀前半にハルシア王の宮廷でチャトランガが遊ばれていた記述を木村氏が故意に引用しなかったのは氏の『５，６世紀に中国，６，７世紀に日本』に伝来した将棋という想像が根底から崩れてしまうからである。７世紀前半のインドに初出のチェスが６，７世紀に日本に伝来したという自説の間違いを証明する記述を隠蔽している」。増川⑦215頁

隠蔽とは恐れ入ったが，もちろん私は隠蔽する気など全くなかったし，そもそも公表されている史料を隠蔽できるのであろうか。

①インドにおいて七世紀前半が最古の文献史料であっても私見に都合はわるくないのである。増川はこれによって，多分２人制の成立を６世紀としているのであろう。もしそれが確実ならたしかに私見にとって都合がわるい。しかし，これが２人制の最古の史料であっても，歴史学研究法ではその存在の下限を明示するのみである。これだけでは２人制の上限はわからず，それについては別に考えねばなるまい。

②実際，これを最古とすることで研究者の見解が一致していても，かんじんな２人制の成立時期については一致していない。増川の「チェス史再構築の１段階」（『遊戯史研究』９号，1997年）によると，「２人制のチェスはマレーの紀元570年頃，ローゼンフェルトの550年，ＦＣゲルシェンの５世紀前半，ＣフェルリーとＡサンビトは紀元前４世紀から紀元４世紀までの非常に広い範囲を想定している」，とのことである。以上は小著も引用して，２人制の成立と出発は不明としている。

③「なお増川は『将棋の起源』では中央アジアのウズベク共和国から出土のＡＤ２世紀のものを２人制チェスの駒と承認して，『ヨーロッパの研究者達にとって大きな衝撃』と述べ，自らもＡＤ１，２世紀頃の成立を示唆していた」。木村⑥22頁

「将棋の起源」③の頃は増川も早い成立だったのである。インドにおける早い成立と日本に遅い到着は自己矛盾と言えようが，最近に至ってようやくインドにおける遅い成立に修正したようである。

④小著は日本将棋がいかにしてでき上がったかを主論にしており，インド以西については概論にとどめた。私の弱い部分でもあり通説によったつもりである。日本将棋の起源だからそれで十分とも思う。それゆえ史料の引用はごく一部にとどめ，この頃は２人制として承認されそうなウズベキスタン出土のものを最重要史料と考えたのである。

（４）　かんじんな部分を紹介せずに論争点を大きくずらす

「第４に木村氏はすべての矛盾を克服しようとして著書の第３章第３節で『出土資料や文献にないからないという論理』は成立しないと公言している。将棋の起源や伝来について資

料がなくても木村氏の空想で判明するという。

将棋（またはチェス）の起源についてカナウジ出土のテラコッタ像をはじめ，チェス史に関する出土資料は少なくない。サンスクリット語文献やペルシア語文献もかなりな点数が発見されている。今後も新しく発見され翻訳されるであろうが，少なくとも発見された文献は――国際的な協力と研究者の国際的な結集の成果であるが――真摯な努力で解読され研究されている。出土資料も綿密な調査がおこなわれている。本書の巻末に掲げた参考資料はそのごく一部であるが，文献や出土資料は多く存在している。

木村氏は自らの空想を弁護するために『資料にないからないという研究法は歴史学にも考古学にもない』（『持駒使用の謎・日本将棋の起源』）と力説している。所詮資料を提出できない理由を弁明しているにすぎない。木村氏がどのような『研究法』を想定していられるのか不明であるが，歴史学や考古学に関する認識を問われる発言であろう。ただいえることは『資料がない』というのは木村氏が資料を知らないか資料を得るための努力を怠っているだけのことであろう。」増川⑦220頁

もっともな部分もあるが，真意のよくわからぬ文章と思う。はじめは「資料にないからないという研究法はない」という小著に反対のはずだから，「資料にないからないという研究法はある」という意かと思ったが，そうでもない。増川といえども歴史学研究法に正面から反対するわけにもいくまい。

木村はインドやペルシャの古代史に弱いからそのように言っているの意らしい。相手の弱いところをつくのは兵法の極意であるが，われわれの論争点は中国や日本の古代である。将棋のある局面でどちらが優勢かを論じている時に，「君は囲碁が弱い」と言われたようなものと思う。

増川は木村の④に対して「日本への伝来の時期も確定していないが，なかには囲碁や双六とさほど変わらぬ六，七世紀と想像する見解も見られる。これは古代や中世初期の膨大な文献史料を一切無視し，将棋の記述はないが将棋が伝来していたとする想像である。」（「将棋の発生と伝播」『考古学ジャーナル』平成10年３月号）と述べている。

これに対して私は反批判した。「資料にないからないという研究法は歴史学にも考古学にもない。……増川は古代の文献を膨大と述べているが，中世近世にくらべれば少ないはずであり，多くの落ちこぼれを予想すべきである。増川の論理のためには歴史的存在及び現象のほとんどが文献にのる必要がある。しかし，もしそうなら古代史研究は現在よりずっと容易になるであろう。存在していたが文献にない場合が多いことに古代史研究の困難があるのである。歴史学の研究法ではのるべき文献にない場合のみないとできるのである。それゆえもし和名類聚抄が今日的百科辞典ならば，それにないからないとできよう。しかし，それが漢和辞典であることは前述した。」木村⑥140頁

反批判として十分と思う。とくに「のるべき文献にない場合のみないとできる」がかんじんであり，それを増川は省略している。これに正面から対抗するのは不可能とみて，論争点

をずらしたのであろう。

（５）　反対の理由もあげられないために非難のみ

「ここでも６，７世紀の日本到着の虚構が明らかになる。これを補うのに木村氏は地理上の知識を無視した意味不明の世界チェスなる造語で自説を隠蔽しようと試みている。この試みは木村氏の矛盾を拡散するだけである。」増川⑦219頁

小著の世界チェスについては前段で少し紹介しているが，その理由については省略して，単なる非難のみである。これにも前史がある。

「復刻版を含む膨大な量のチェス書の中で世界チェスという表現は見当たらない。どの研究会やシンポジウムにも世界チェスという言葉は使われていない。このような概念や用語は必要なかったからである。世界チェスという造語で総てを解決しようとする企ては数世紀にわたり蓄積されたチェス史の研究を無視するものである。」増川⑤28頁

これに対しては「増川は世界チェスという造語はチェス史のほうで使われていないからまちがいとも述べている。新造語がすべてまちがいになると新研究は不可能になるであろう。これはチェスと象棋の動きの一致から導かれた私見の中でも最も単純明白なものである（第２章第２節）。それゆえチェス史のほうですでに気づかれているかもしれず，もしそうならあらぬ疑いをかけられそうと心配していたのであるが，増川のおかげで私の創見であることが確認され安心した。増川もこれに反対することは無理と承知していたと思うが，遅い到着説の最大の障害になるためシャニムニ反対したのであろう。」木村⑥128頁

「チェス史のほうで使われていないから」では反対の理由にもならぬことは増川も承知していたはずである。またこのことで評判を大きく下げたことも想像できたであろう。それゆえもう使えない。さりとてほかに思いつかずに非難のみになってしまったのに違いない。以下に世界チェスがなぜ単純明白なのか，なぜ遅い到着の増川説に最大の障害になるのかについても述べよう。

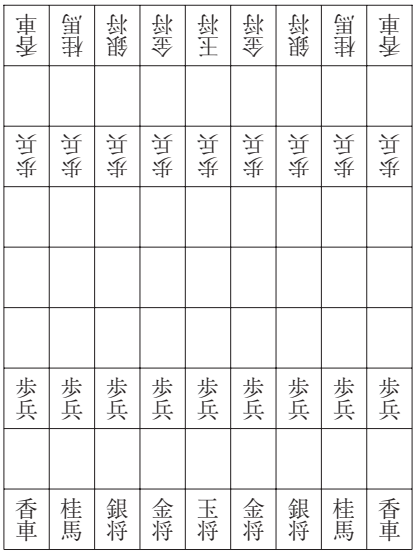
先ず表１をごらん願う。現行直前のチェス，現行象棋，現行マックルック（タイ将棋）の駒の動きが歩兵相当を除いてほとんど同じなのである。現行象棋独特の砲は中国で創作され，これを加えて現行象棋ができ上がったのである。また，現行チェスはナナメ四方に２つずつだったビショップを角行の動きに，ナナメ四方に１つずつだったクヰーンを飛車プラス角行に大改良してでき上がっている。

現行象棋は11世紀，現行チェスは15世紀のことであるから，それ以前は駒の型や名前が異なっていても，かんじんな駒の動きで日本を例外として世界中がほとんど同じだったのである。それゆえ世界チェスと名づけたのである。単純明白と言えよう。

その特長は銀将相当がナナメ四方に２つずつ，桂馬相当が八方桂，香車相当が飛車と同じというように，日本将棋の駒の動きより強い改良型である。もちろん日本将棋も大改良されているので現行のものとの比較はできない。現行のものから改良を逆にたどって，飛車角行

［表１］世界チェスの動き

	現行直前のチェス		現行象棋		現行マックルック	
玉将	キング	玉将に同じ	将	タテヨコ一つ	クーン	玉将に同じ
金将	クィーン	ナナメ四方に一つ	士	ナナメ四方に一つ	メット	ナナメ四方に一つ、初手二つ
銀将	ビショップ	ナナメ四方に二つ	象	ナナメ四方に二つ	コーン	銀将に同じ
桂馬	ナイト	八方桂	馬	八方桂	マー	八方桂
香車	ルック	飛車に同じ	車	飛車に同じ	ルア	飛車に同じ
歩兵	ポーン	①前に一つ ②初手に二つ可 ③最下段で成る ④その筋のものに成る ⑤駒をとる時はナナメ左右	兵	①前に一つ ②四段目に並べる ③五段目から成る ④左右一つがプラス	ビア	①前に一つ ②三段目に並べる ③三段目から成る ④メット(金将)に成る ⑤その時ウラ返す ⑥駒をとる時はナナメ左右
			砲	①動きは飛車に同じ ②駒をとる時，間に一つ駒が必要		



［図２］平安将棋（持駒不使用）

を除き，持駒不使用にすれば平安将棋（図２）になる。これと比較すれば世界チェスのほうがずっと強い動きである。

それゆえ遅い到着の最大の障害になるのである。「大いに強調したいのは私見の世界チェスである。10世紀後半なら世界中の将棋は桂馬相当が八方桂に香車相当が飛車と同じ動きになっていたのに違いない。象棋は現行直前だから確認できる。象棋がそうならインドからの

［表２］将棋伝播の波

		特　　長	伝播の範囲
アジア 将　棋	インドの第１波 タイの波	銀桂香相当の弱い動き 歩兵相当の３段目並びと成り	全世界（推定） タイ・日本・中国（推定）
世　界 チェス	インドの第２波 インドの第３波	銀桂香相当の強い動き ポーンのナナメ左右取り	日本を除く全世界 中国・日本を除く全世界

ルート上のマックルックも同様になっていたのに違いない。しかるに日本将棋のみが唯一の例外であり，平安将棋は桂馬も香車も現行と同じの弱い動きである」。木村⑥145頁

実はこの「世界チェス」は14年ほど以前に発表し，その時伊東倫厚に「感佩しました」とほめられ自信ありなのである（「持駒使用のはじまり」『遊戯史研究』２号，平成２年）。増川も好構想であることと自説に対する最大の障害であることがわかっていたため目の敵にしているのであろう。なお，小著では伝播の波と世界チェスとアジア将棋を３点セットで詳論している。そのうち世界チェスのみをとりあげるのは不親切と言えよう。

また表２をごらん願う。インドからの第一波が日本に到着し，日本でのみ保存されたのである。古代インドは将棋の最先進流行地域であった。それゆえはじめの弱い動きのままではすまずに動きの強化という改良がすすみ，相ついで外国に伝播したのに違いない。

文化の伝播や民族の移動など，移動するものがいくつかの波になる実例は歴史上多い。それゆえ，歴史学か人類学の素養のある人なら結論だけでも賛成しそうにも思う。しかるにチェス史には伝播の波も世界チェスの概念もないとのことである。日本人はタテヨコ文字を曲りなりに読めるが，チェス史の研究者はタテ文字が読めない。それゆえ，中国や日本がかかわるこのような世界史的な問題になると日本人が有利になるのであろう。

ちなみになぜ日本のみが唯一の例外として弱い動きのままであったのかについては小著で詳論しているが，以下では結論のみとしよう。駒型になったのが案外に早かったからである。そのため立像型のものとは別のゲームという意識が生じ，せっかくの改良型を拒絶し，全く別の方向すなわち持駒使用に改良されたのである。

また，駒型になったために敵味方同型になり，相手の駒を取って自分用に使えるという発想が可能になったのである。もちろん，弱い動きのままでは手づまりや引き分けが多くなり，それを打開するための持駒使用に違いない。外国の将棋はすべて敵味方色わけであるからそのような発想は困難に違いない。あたり前のことであるが，日本将棋は持駒使用にふさわしくつくられているのである。しかし，それは別の理由で駒型になっていたからできたことであり，持駒使用を発想してから駒型にしたのではない。この点は強調しなければなるまい。

（６）　増川宏一以外の正攻法批判の各位に答える

いま小著は数人の研究者から正攻法による批判を受けている。主に６，７世紀到着は早す

ぎるというものである。増川宏一と同様であるし，実は私も印象としては早いと思っているが，論理に従ったつもりである。ただし，早い到着も遅い到着もおかしいので８世紀頃というのが多数派らしい。手紙や面談のみの非公式のものなのでお名前は遠慮する。

「最古の史料が1058年頃の興福寺駒そのほかなので，それよりさかのぼるほどだんだん苦しくなり，400年ほども以前の到着はいかにも苦しい。」「考古学では様式の変化で実年代は求め難い。」以上の２つがもっともな批判であると思っている。以下にお答えする。

①　どちらにも小著の中で配慮したつもりであるが，いささか軽視していたと反省している。

②　そうなるかもしれないと考えて，「８世紀の可能性も少しある」「８世紀は見解の相違の範囲内」とも述べている。

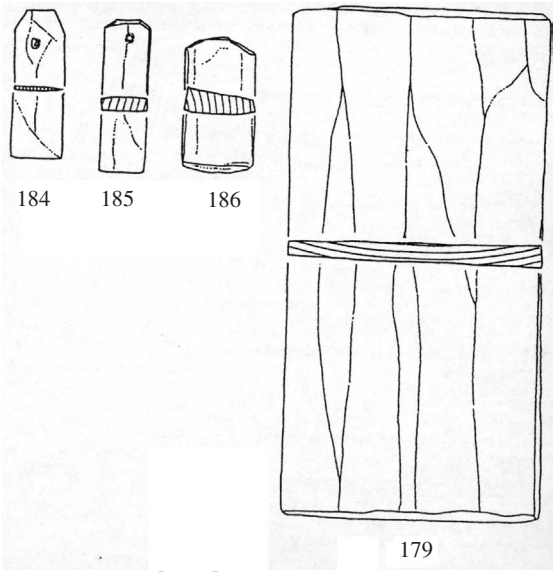
③　小著では早い到着の理由を５つほどあげている。すなわち，ⓐ受け入れ可能の情勢はすでにあった。ⓑ人類に最も好まれた将棋は港から港へと早く到着したであろう。ⓒ象棋と将棋の大きな違いは早く到着してそれぞれに異なった方向へ発展したからである。ⓓ日本将棋（平安将棋）の駒の動きが弱いのはインドからの第一波である原将棋が到着して保存されたからに違いない。ⓔ1058年頃の興福寺駒は持駒使用であり，それに至るまで多くの改良と変化が必要なので，400年ぐらいであろう。

以上のほかに中国に５，６世紀に到着という想定がかなり確実なため，有力な補証になることは前述した。また「日中は隣国なのでほぼ同じものが日本に少し遅れて到着したはずである。」と述べており，これも可能性の大きい常識論と思う。将棋は盤上遊戯中最高に流行したものであり，当時の日本人も歓迎したはずである。

④　小著のまえがきで「日本将棋は世界各地の将棋にくらべてきわめて特異である。①持駒使用がほかになく最大の特長であることに異論はないと思うが，そのほか②駒の名前，③駒の数，④駒の型，⑤多種駒成り，⑥かんじんな駒の動きも他と異なっている。」「われわれは見慣れているのでなんとも思わないが，外国将棋のプレーヤーには不思議な存在に違いない。」と述べている。最も特異な日本将棋のためには長い期間が必要であろうし，各位は見慣れているので簡単に考え，簡単にでき上ると考えがちのようである。歴史はアト講釈になるので一層そうなりやすくもあろう。たとえば興福寺駒の中には酔像という新しい駒が習書木簡中にある。新しい駒を創作するためにはそれなりの事情があり，簡単にできることではあるまい。

⑤　なにも書いてないが駒型に似ているので駒の素材かもしれないものが平城京から出土している（図３）。私は木札（お守り札）の可能性もあるので「考慮の外におく」と小著で述べた。当時は余裕があったので遠慮したのだが，今は余裕がなくなったので考慮の内に入れたい。「平城京はかなり掘っているのに駒の出土がないので将棋が存在した可能性は小さい」という批判に対抗できよう。

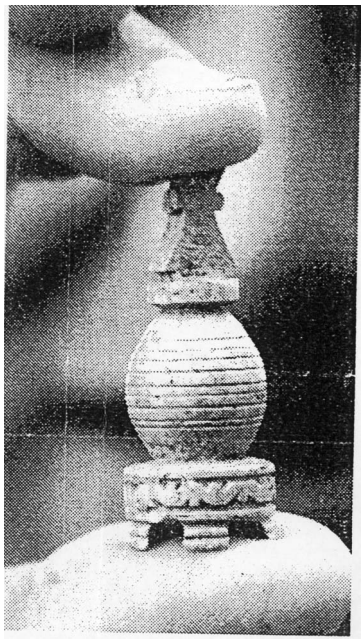
⑥　少し以前にアルバニアから５世紀のチェスピースなるものの出土が報道されている



（『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘報告
――長屋王邸・藤原麻呂邸の調査――』
奈良県教育委員会、一九九五年）

［図３］駒？

誰が指した？
1500年前のチェス
アルバニア南部の都市で最近，英国の考古学者らが発見した欧州最古とみられるチェスの駒。大きさ４センチで，象牙（ぞうげ）でできている。５－６世紀のものとみられ，これまでの定説より約500年さかのぼることになる。チェスは４－５世紀にインドで発祥した。
写真はロイター



［図４］文化財発掘出土情報　2002.9

（図４）。私はこの地域の歴史に弱いし，考古学にも弱いのでなんとも言えない。また，出土駒についてはその後に修正というケースが内外ともに多いので慎重でありたい。ただし，写真でみる限りではチェスピースであるらしい。問題は５－６世紀か否かであろう。もしそれが確実なら，日本に６，７世紀到着という私見にとって最有力の補証になる。

⑦　最後に，考古学では様式の変化で実年代を求めることは困難とのことであるが，それ

を捨てるのはいかにも惜しい。小著では興福寺駒によってＡＤ1000年頃に持駒使用への改良とし，そこに至るまでに多くの改良と変化を詳述したので，到着後400年ほどの可能性が最大と想定した。

考古学では自然科学に近い実証性を求めているようであるが，文献史学の古代史ではそこまで求め難く，可能性の大きい仮説で満足するよりない。可能性の大小の判断は将棋の形勢判断の如くにむずかしいが。後世の事情からさかのぼらせる研究法は古代史の有力なそれと言えようし，その際に年代を推測することも許されよう。

以上である。これらに小著で述べたものも加えてトータルで早い到着（６，７世紀）の可能性を判断していただきたい。もちろん，しかるべき理由の批判を受けたらいつでも修正するつもりである。歴史の研究者は自己の立場やプライドより史実を尊重しなければなるまい。実証主義史観の私はとくにそのつもりである。

今のところ，６，７世紀到着を７，８世紀に修正するかもしれないが，まだその必要を認めていない。そのていどの小修正なら容易なのであるが，９，10世紀というような大修正では多くの改良と変化という想定が崩壊してしまうであろう。

増川はもちろんほかの各位も小著の到着後の経過時間の長さに反対らしい。駒型や持駒使用など重要問題がたくさんあるのに，わずかな討論しかしていない。私は総合的な議論を望んでいるのだが，到着の時期のみが突出してホットになってしまったという次第である。

お　わ　り　に

「木村氏は著書の『あとがき』で自著は『４名のプロ歴史家からは合格点をいただいている』と自画自讃している。架空の『プロ歴史家』を創作して，自著を権威づけようと試みている。１人では信憑性が乏しいので『４人』を作り上げたのであろう。

資料の無い（実は木村氏が知らないだけの）木村式空想を認める『プロ歴史家』は，残念ながら寡聞にして知らない。４名の氏名も専攻分野も，所属の研究機関も述べることができないのは，これも空想上の人物だからである。架空の人物によって評価されたと自讃しても，内容の矛盾が解決されるものではない。なぜこのような記述があるのか，はなはだ諒解に苦しむ。

『持駒使用の謎・日本将棋の起源』の唯一の功績は，想像と虚構による記述がいかに事実から逸脱するかという，稀にみる反面教師の役割を演じたことである。将棋史にかぎらず，すべての遊戯史にわたって，後進の戒めとして立派な範を垂れたという点にある。」増川⑦221頁

私にプロ歴史家の友人知人が多いことも，彼らが不合格などにするはずがないことも，増川は承知しているはずなのによく書いてくれたと思う。実は将棋史研究家でもある伊東倫厚（北海道大学教授・中国哲学専攻）に小著を謹呈したところ，「永年の御研究の蓄積の結実に対しまして深く感佩申上げる次第です。また拙文を紹介頂き光栄に存じます。まだあちこ

ちを拝誦致して居る段階ですが，先生の御創見が満載されていることに驚きを禁じ得ません。」というハガキをいただいた。ライバルにほめられてこんなにうれしいことはない。増川も同様に理解したはずなのに正反対の評価である。

もちろん評価は自由である。しかし，相手の論旨の紹介は自由でない。しかるに増川は私見を大きく変えて紹介した。すなわち，小著がダイスなし２人制（原将棋）の到着を明示しているのに，ダイスつき４人制の到着と紹介した。また，中国に５，６世紀到着の史料として小著は７世紀前半の周書・隋書・芸文類聚を使用したのに，それらより200年後世の『玄怪録』を使用したと紹介している。

人の論旨を紹介することは案外にむずかしくしばしば誤解されるそうだが，これほどの誤解はありえず，増川が意識的にやったことと判断せざるをない。

Time of Arrival of "Shogi"—Japanese Chess—in Japan: Response to Koichi Masukawa's Criticism

Yoshinori KIMURA

This writing is a response to Koichi Masukawa's criticism of my assertion regarding the time of arrival of the old Shogi game on which modern Shogi is said to be based.

It is generally accepted that Shogi, as well as chess, originates from a game called *Caturanga* in India. Just when the game was brought to Japan, however, as well as the form the game took at that time, is an on-going debate. I assert that standing-figure pieces such as those used in chess were imported during the 6th or 7th century. Masukawa argues against my assertion by stating that pieces printed with Chinese characters were brought to Japan between the end of the 10th century and the beginning of the 11th century.

In this writing, I will first point out Masukawa's violation of the rule in the discussion of this issue. Secondly, I will challenge the evidence Masukawa utilizes to support his point by giving an accurate analysis and interpretation of related documents and source material. In addition, by clarifying the style of Japanese chess and how it is played, I will refute Masukawa's criticism in an attempt to enhance the validity of my assertion.